

森岡貞香の最終歌集『帯紅』

二〇一一年十一月十九日に「森岡貞香を語る会」（砂子屋書房企画）がありました。森岡貞香の最終歌集『帯紅』が出た機会に森岡ファンが集ってその歌の特徴について語り合いました。若い歌人たちのシンポジウムがメインの会でいろいろと考えさせられました。

わたしは一九九六年に出た『現代百人一首』（朝日新聞社）の中で貞香の、

ゆふまぐれ二階へ上る文色あじろなきところを若わかしかして雁かりかわたる

【珊瑚數珠】

を挙げて「森岡貞香の歌の特徴がよく出た一首である。まず、夕暮れに自宅の二階へ上がってゆく、その階段の途中と見てよいだろう。あるいは二階へ上がってしまったのかもしれないが、二階へ上るといふ行為が大事なことで、それから何をするかということとか、二階へゆく目的とか、それはどうでもよい。その途中で、空の一隅を雁が渡ってゆくのを聴いた。雁が渡るのは、昼とも夜ともつかないほんやりとした境を渡るのである」という風に書いていまし

た。そして「無理につじつまをあわせればそんな解釈になるだろうが、わたしは解釈よりも、「二階」「文色なきところ」「若しかして」と来て、突如「雁」と言いわたされるとき意外性が楽しい」と言っていました。

あれから十五年経ち、貞香の没後、若い歌人たちの、たとえばこの歌（いつのまにか貞香の代表作の一つになっていますが）についての評価も解釈もそう変わってはいませんが、「文色なきところ」をどこに設定するかとか、雁のイメージを視覚的な幻想とするかとか細かいところで、わたしとの世代差が見えたりしましたが、大筋のところでは一致していました。

もう一つ、その議論で話題となったのは、破調（五・七・五・七・七の約束から逸脱した字余り字足らずなど）の多いことでした。今挙げた歌でいえば第四句（「ところを若しかして」）の九音がそれです。これは、森岡貞香だけではなく、破調がおもしろい味を出す場合はたしかにあります。しかし、いつでも許されるわけではありま



せん。とりわけ、短歌を第一歩から学ぶ立場からすれば、まず定型を守る事が大切であること、いうまでもありません。では、破調はどのような場合に例外的に許されるのか。そんなきまりがあるわけもありません。一首一首について個別的に見てゆく外ないのです。『帯紅』という森岡さんの最終歌集からいくつか挙げてみましょう。さすがに内容も平明になり、大きな破調も少なく、どこを読んでも親しみやすい本であります。

わが門に棗なつめの散り葉の掛かりをり出でてゆかむに何か嘆かむ

『帯紅』

内容は単純で、自分の家の門にナツメの葉の散ったのがかかっていたが、外出しようとしてそれを見て「何か嘆かむ」と思ったというのでありましょう。第二句に一音の余りがありますが、これは正確に言うために生じた破調で、むしろ当然でありますから問題になりません。やはりこの歌でおもしろいのは下の句、特に「出でてゆかむに」から「何か嘆かむ」へと続くところであります。「なにを嘆くことがあるか、なにも嘆くことなどない」といつつ、ナツメの「散り葉」を「嘆」いているので、このきっぱりした古語の使用が、韻律の上でも、いい味を出しております。

ねむれざる長夜に人に會ひしなどわれは短く眠りしならむ

『帯紅』

「長夜」は秋冬の夜長ですが、チョウヤまたはジョウウヤと読んでいいのでしょうか。夜長の夜に誰かと会ったのかと思つていまずと「わ

れは短く眠りしならむ」ですから、夢のなかで会ったことがわかる仕掛けであります。しかし、歌は「人に會ひしなど」から「われは……」以下へとなだらかに、読者にある想像を強いながら続くのであります。ごたごたと余分な説明をすることなく、意味がすつと通つていきます。あとはこの「人」は誰かを考える段階に入るだけです。

朝戸出に片手さつと上げ出でゆきしを繰り返しわが思ひ出づる朝

『帯紅』

という歌が、その二首さきに置かれていますから、終戦の直ぐあと、戦地から還つたあとに急死された陸軍の幹部将校だった夫が、さきの歌の「人」である可能性は大きいのでしょう。戦後六十年以上経つても、森岡貞香の歌には、底流となつて、夫との別れとそのあとの一人息子の子育ての思い出が存在します。

椿など花殻はながらいたく汚れぬしに掃き寄せたれば卑しさの消ぬ

雨傘よりも綺麗な杖を持たむとて雨傘のやうなる杖を見てをりわれの不圖よろけし時になつかしむよろける母の手を握りし日父も母も生を終へたるこの土地の朝のくぐもり冬の庭しづもる會ひがたき人に會ひ得し戦時の日のまざまざしきなり面妖なる夜半

『帯紅』の終りの方から歌を引きながら、明治神宮献詠歌会の委員会の席上の、お元気だった森岡さんの最晩年のころの話しぶりなどが思い出されるのであります。